主催団体特別賞

「トイレから垣間見た日本人の心」

2008 年 4 月に来日後、日本語学校で勉強した後、現在の大学に入学しました。日本でアルバイトをする中で、様々な経験をし、様々な国籍の人々と交流することができました。日本での異文化体験を通して学んだ「日本人の心」についてお話しいたします。

デン　ヤ（田　　野）
Ms. Tian Ye
（中国・大学生）

「トイレにはそれはそれはキレイな女神様がいるんやで/だから毎日キレイにしたら/女神様みたいにべっぴんさんになれるんやで」

みなさん、トイレの神様という歌を知っていますか。

わたしはこの歌を聞く度に、大学へ進学すると同時に、二年間働いていた焼肉屋でのアルバイトのことを思い出します。

焼肉屋での初仕事はトイレ掃除でした。しかし、正直なところ、臭くて汚いトイレ掃除は気が進みませんでした。焼肉屋のアルバイトなのに、真っ先にトイレ掃除をさせられたことに強い抵抗を感じたわたしは、その後もいい加減に済ませていました。

ところが、数日経ったある日、アルバイト先のチーフが率先してトイレ掃除をする姿を見かけました。チーフは、便器の汚れ落としはもちろん、鏡や洗面台にいたるトイレの隅々まで、ピカピカになるまで一所懸命に掃除をしていました。そして、仕上げにトイレットペーパーの端を三角折にして掃除を終えたチーフは、「お店の善し悪しはトイレの掃除が行き届いているかそうでないかで決まるんです。トイレを綺麗にして、お客様に不快な思いをさせないことはお店の信頼を得る上でとても大切なことです。忘れないで。」と私に話かけました。

わたしはチーフの言いつけ通り、それからは手を抜かずにトイレ掃除をするようになりました。そんなある日、お客さんに「このお店のトイレはきれいだね」と声をかけられました。わたしは、この一声で自分の仕事を認めてもらえたような満足感を覚え嬉しくなりました。不思議なことに、それ以降トイレ掃除が全く苦にならなくなりました。そればかりか、トイレを綺麗にすることで気分も爽やかになり、心地よささえ感じるようになりました。トイレ掃除は、お客さんのためだけではなく自分自身の心も磨いていたのです。ああ、これだ。「トイレの神様」の正体がわかった瞬間でした。トイレ掃除は日本人気質を端的に表すものであり、トイレから日本人の心が垣間見えた気がしました。

代金以上のマナーやサービスという付加価値を提供することで、お客さんに金銭では量ることのできない満足感を得てもらう。目先の利益ではなく、お客さんへの「気配りや思いやり」を何よりも大切にする日本人の心。まさにこれこそが日本人の美徳だと思いました。

日本の江戸時代は社会が成熟し、マナーや礼節、他社への思いやりといった日本人の美徳が形成された時期であったと聞きます。日本が戦後いち早く経済発展を遂げたのも、国民の勤勉さに加え、この伝統的美徳を大切に守りぬいたことが大きな要因であったにちがいない。そうわたしは思っています。

日本人の美徳を守り続ける生き方が、災害時などの冷静沈着な行動を生みだし、それが略奪や暴動どころか、他人を助けることを最優先させる思いやりにつながり、世界中から尊敬され称賛される日本人の品格の高さにつながっているようにも思います。

急速な経済発展を遂げつつある中国でも、日系レストランの進出により日本的なマナーやサービスに大きな付加価値があることが認識されつつあります。しかし、それはまだまだ始まったばかりで、トイレ掃除に時間をかけて綺麗にするという意識はまだまだ定着していません。

わたしは、損得に関係のない他者への気配りや思いやりという日本的な美徳を、中国の人々にも学んでほしいと思っています。そのために、日本での貴重な経験を多くに中国の人たちに伝えていきたいと思っています。

ところで、みなさん、どうですか。わたしは、少しはべっぴんさんになれたでしょうか。
トイレの女神様に負けないべっぴんさんを目指して、これからもトイレ掃除を続けていきたいと思っています。